

ハイエク全集 -5 政治学論集「自由主義の再興に向けて(3)

- 社会主義は全体主義という鬼子を生む - 」

春秋社 2009年12月20日刊を読む

自由主義の再興に向けて(3) - 社会主義は全体主義という鬼子を生む -

1. 私は社会主義政党が意図的に全体主義体制をめざしていると非難したことはない。また昔の社会主義運動の指導者にはそのような傾向があったのではないかと疑ったことさえない。そのことについても読者に注意を促しておかねばなるまい。私が本書で論じ、イギリスの出来事によってその正しさを確信したのは、社会主義的な計画がどのような結果をもたらすかということである。その結果は思いがけないものではあるが、しかし避けることはできない。そなわち、そうした政策が追求されることになれば、全体主義勢力が優位に立つような状況が不可避免的に作りだされるのである。「社会主義は、大半の社会主義者が決して容認しないような方法によってしか表現されえない」と私は書いた。さらにこれに「古いタイプの社会主義政党は、彼ら自身のもっている民主主義的理想によって抑制されていたし」、そして「選んだ任務を実現するのに必要な冷酷さを持ちあわせてもいなかった」と付けくわえた。残念ながら、イギリスの労働党政権から受けた印象は、25年前のドイツの社会主義者に比べると、現在のイギリスの社会主義者のあいだではそのような抑制力が弱くなっているというものであった。1920年代、同じような、あるいはもっと深刻な経済難に襲われていたドイツ社会民主党でも、最近のイギリスの労働党政権ほどに全体主義的計画に傾斜してはいなかった。
2. 社会主義的政策のもたらす効果についてここで詳しく検証することはできないので、偏見が少いと思われる他の研究者の意見をいくつか紹介しておこう。もっとも手厳しい評価を下したのは、実はつい最近まで労働党员だった人たちである。アイヴァー・トーマスは、労働党を離党した理由を説明しようとしたと見える著書において、次のような結論に達している。
3. 人間の基本的な自由という観点からいえば、共産主義、社会主義、国家社会主義に違いはない。これらはどれも、集団主義的な、全体主義的な国家の例にすぎない。……根本的には、完成された社会主義は共産主義と同じもので、ファシズムとも大した違いはない。
4. もっと憂慮すべき事態は、行政による恣意的管理が増大していることと、イギリスの自由を擁護してきた基盤である「法の支配」が徐々に破壊されていることである。その理由については『隷属への道』第6章で論じている。このプロセスはもちろん、最近の労働党政権が登場するずっと以

前からはじまっており、戦争によって勢いを得たものである。しかし、最近の労働党政権下で計画経済に重点が置かれるようになってからは、「法の支配」がイギリスで今でも生きているのかさえ、疑いを感じさせるほどにいたっている。すでに 25 年前、最高裁判所長官が「新たな専制」についてイギリス国民にたいして警鐘を鳴らしたが、最近の「エコノミスト」誌によると、今では、それは危険の域を越えて現実になっているという。この専制は、良心的で誠実な官僚制が、国のためになると信じることをために行うものではある。にもかかわらず、それは恣意的な政府であり、実際には議会の効果的な掣肘を受けることがない。その機構は現在のところ良い目的のために機能しているが、それ以外の目的のためにも同じように効果的に機能するものである。最近イギリスの著名な法学者が、こうした傾向を慎重に分析したうえで次のような結論に達しているが、これは決して誇張ではないように思われる。

5．今日イギリスは、独裁体制に陥るかどうかの瀬戸際に立っている。体制の変化は簡単で、速やかに起こり、完全に合法的に達成することができる。すでに、その方向への歩みはかなり進んでおり、残り数歩のところまで来ている。なぜなら、現政府が掌握する権力は絶対的で、成文憲法や有効な第二院によるチェックといったものがないからである。

6．イギリス労働党政権の経済政策とその効果についての詳細な分析にかんしては、ジョン・ジュークスの『計画による試練』を紹介するだけで十分だろう。本書で一般論として述べた事象について具体的に論じたものとしては、私の知るかぎり、もっとも優れた議論である。ここで私がなにを述べるよりもうまく本書を補完してくれているし、イギリスのみにとどまらない重要な教訓を与えてくれる。

7．今後再びイギリスで労働党が政権に就くことになったとしても、大規模な国有化や計画経済の実験を再開することはないだろう。しかし、イギリスでもその他の国々でも、組織的な社会主義の猛攻を食いとめたとはいえ、それは自由の保持を切望する人びとにとって一息つく暇を与えられたにすぎない。そのあいだに、われわれは自らの展望を再検討し、社会主義の遺産のなかから自由社会にとって危険な部分を取りのぞかなければならない。われわれ自身の社会目標の概念に修正を加えなければ、徹底した社会主義がほんのわずかだけ速く社会を進行させたのと同じ方向へとわれわれも漂いつづけることになるだろう。

P58 ~ 60

- 2010 年 1 月 14 日 林明夫記 -